慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国遼東半島における地域ツーリズムの構築 : 旅順周辺の観光開発の事例から
Sub Title	The construction of local tourism in Liaodong Peninsula, China : a case study of tourism development in Lushun area
Author	王, 慧琴(Wang, Huiqin)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2013
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.75 (2013.) ,p.101- 117
JaLC DOI	
Abstract	Lushun, a city located at the southernmost tip of Liaodong Peninsula, is widely known as the battleground of both the Sino–Japanese War and Russo–Japanese War of the 19th century. In fact, ruins and monuments from that era of conflict still remain in the form of attractions and patriotic education bases. However, despite their new-found use in the area of tourism, the facilities were not made available to foreigners until November 2009. Since then, Lushun has attracted many international tourists such as those from Japan, Russia, and Korea. Unfortunately, historical attractions, particularly those related to war, do not tend to inspire positive emotions for visitors, and as such, it is probable that the number of tourists will eventually decline. Accordingly, it is of benefit to consider alternative future resources for tourism if the goal is to make tourism in Lushun sustainable. This paper examines case studies of fishing villages in Lushun in an attempt to clarify the environmental development of the fishing community, the people's efforts toward proactive tourism development, and the effects of such activities on overall community development.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000075-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国遼東半島における地域ツーリズムの構築

── 旅順周辺の観光開発の事例から ──

The Construction of Local Tourism in Liaodong Peninsula, China

——A Case Study of Tourism Development in Lushun Area——

王　　慧　　琴*

Wang Huiqin

Lushun, a city located at the southernmost tip of Liaodong Peninsula, is widely known as the battleground of both the Sino–Japanese War and Russo–Japanese War of the 19th century. In fact, ruins and monuments from that era of conflict still remain in the form of attractions and patriotic education bases. However, despite their new-found use in the area of tourism, the facilities were not made available to foreigners until November 2009. Since then, Lushun has attracted many international tourists such as those from Japan, Russia, and Korea. Unfortunately, historical attractions, particularly those related to war, do not tend to inspire positive emotions for visitors, and as such, it is probable that the number of tourists will eventually decline. Accordingly, it is of benefit to consider alternative future resources for tourism if the goal is to make tourism in Lushun sustainable. This paper examines case studies of fishing villages in Lushun in an attempt to clarify the environmental development of the fishing community, the people's efforts toward proactive tourism development, and the effects of such activities on overall community development.

Key words: tourism resources, tourism facilities, rural tourism, dark tourism, negative emotions

キーワード：観光資源，観光施設，郷村観光，ダーク・ツーリズム，負の感情

I.　はじめに

中国では1990年代以降，全土でツーリズムが展開し，21世紀にはいって急速に産業として発展を遂げている。本論文はこれまで考察の対象とされてこなかった遼東半島，特に旅順を中心としたツーリズムの現状と課題について考察する。遼東半島は，日清戦争や日露戦争の舞台となり，大連は日本の大陸進出の拠点で，戦前には約2万人の日本人が住んでいたとされ，現在も経済的に強い結びつきを持っている。しかし，旅順は日清戦争，日露戦争の古戦場であり，植民地時代の記憶を生々しく想起されることもあり，外国人への開放は遅れた。旅順には戦争の遺跡や記念碑が沢山残されており，愛国教育基地

* 慶應義塾大学総合政策学部非常勤講師

として活用されてきた。

しかし，2009年外国人向けに開放され，今後は観光資源として利用され，日本，ロシア，韓国などの観光客が増えて大きく変化することが予想される。旅順は，現在では国家級風景名勝区で，国家級自然保護区に指定され，観光開発の拠点として整備されつつある。旅順とその周辺が，地域ツーリズムとして観光開発されることで地元の人々の意識がどのように変容していくかに焦点をあてて考察を試みる。

II.　問題意識と調査地

1.　問題意識

1978年経済改革開放後，中国の観光は試行錯誤の時代であったが，1986年頃から雲南省や貴州省の少数民族地区を手始めとして，貧困克服・経済発展の機動力として国家や地方政府が観光推進に力を入れるようになった。1992年以降，中国旅游局は観光産業を推進するために，毎年定められた主題を設定して，観光推進に工夫を凝らしてきた。1992年から2013年に至る20年間の観光の主題は表1の通りである。

この一覧を見て気づくことは，その時々の世界情勢，21世紀の到来，北京オリンピックの開催，流行する観光の潮流，健康ブーム，中国での催事，政治スローガンなどと関連付けられることが多い点である。たとえば2002年にユネスコは「国際エコツーリズム年」を設定したが，それに先立つ1999年が「中国生態環境游」であった。エコツーリズムは1992年にリオデジャネイロで行われた地球サミットで，21世紀の地球環境保護のために取り決められた「アジェンダ21」の中にも盛り込まれていた。「持続可能な開発」に観光を利用とする世界での動きが，中国での1992年以来の観光年設定に影響したと考えられる。しかし，海洋権益を守ろうとする姿勢を強めている2013年を「海洋旅游年」と名付けたことには政治的な動きに影響されることが読みとれる。

このうちでも，2006年の中国全体の観光の主題は「中国郷村旅游年」とされており，「新農村，新観光，新体験，新風習」（新しい農村，新しい観光，新しい体験，新しい流行）などの内容が盛り込まれていた。1998年に引き続いて再度「郷村観光」の大キャンペーンを展開し，現地滞在型の観光を推奨したのである。この年を契機に，中国の農山漁村が持つ，豊かな自然環境や美しい景観を観光の対象として活用する動きが活発化して，地域の観光開発が大きく注目されるようになった。普通の農山漁村の日常生活に価値を見出し，観光客が地元に滞在して住民が交流し，農山漁村の自然や環境や景観を楽しむ滞在型の余暇活動は，日本ではグリーン・ツーリズムと呼ばれている［佐々木2008：112］。島嶼部や沿海部の漁村に滞在して海辺の生活を体験する余暇活動は特別にブルー・ツーリズムと名づけられた。こうした運動の先駆的形態は，欧米での1960年代の高度経済成長に対抗する，カウンターカルチャーを志向する人々の間で始まった。農家に滞在し休暇を過し，農業，農家生活，地域文化及び農業景観を楽しむ滞在型の観光が流行となった［王 2000：23］。これは1960年代に盛んになったマス・ツーリズムに対する批判でもある。グリーン・ツーリズムに続いて，世界各地で自然環境の保全を目的とするエコツーリズムが展開されつつある。中国では現在は「生態観光」の看板を至る所で見ることが出来るようになっている。村全体をエコ・ミュージアム，つまり生態博物館とする動きも少数民族居住区に出現するなど，生態観光は盛んになってきた。

中国では余暇を過す場所として農山漁村が脚光を浴びたのはここ10年足らずのことである。直接の

表1　経済改革開放後の観光の主題一覧

	中国語	日本語訳
1992年	中国友好観光年	中国友好観光年
1993年	中国山水風光游	中国山水景観観光
1994年	中国文物古跡游	中国文化遺産旧跡観光
1995年	中国民族風情游	中国民族風土観光
1996年	中国休閑度暇游	中国レジャーリゾート観光
1997年	中国旅游年	中国観光年
1998年	中国華夏城郷游	中国華夏都会郷村観光
1999年	中国生態環境游	中国生態環境保護観光
2000年	中国神州世紀游	中国ミレニアム観光
2001年	中国体育健身游	中国スポーツ健康観光
2002年	中国民間芸術游	中国民間芸術観光
2003年	中国烹飪王国游	中国グルメ大国観光
2004年	中国百姓生活游	中国民衆生活観光
2005年	中国紅色旅游年	中国「赤」ツーリズム
2006年	中国郷村旅游年	中国郷村観光年
2007年	中国和諧城郷游	中国調和社会郷村観光
2008年	中国奥運旅游年	中国オリンピック観光年
2009年	中国生態旅游年	中国エコツーリズム観光年
2010年	中国世博旅游年	中国世界博覧観光年
2011年	中華文化游	中華文化観光
2012年	中国歓楽健康游	中国歓楽健康観光
2013年	中国海洋旅游年	中国海洋観光年

出所：中国国家旅游局ウェブサイト（http://www.cnta.com.cn）により作成。

要因としては政府の政策があげられるが，近年では，経済の高成長で，国民の収入増加，自家用車の普及，休日制度の改善（大型連休の導入）などによる国内の旅行客の増大も後押しの一因になったと思われる。激しい競争にさらされる現代社会では，ストレス解消のために，人びとは農山漁村の大自然にふれ合い，自然の動きについて学びたいという気持ちが高まってきたようだ。従来は観光と言えば，名所旧跡や遺跡などを見るのが典型的なスタイルであったが，現在の内容は徐々に変容しつつある。中国の豊かな観光資源はその約70％が広大な農村地域[1)]にあるとされ，農村地域の観光開発は大きな潜在的可能性を秘めていると考えられる［王 2008：83］。しかし，中国の農山漁村を観光地とするツーリズムの推進は数年前から全国的に広がっていったとは言え，今はまだ初級段階にとどまっている。他方，農村に比べて漁村地域の観光化は遅れて始まった。漁村では近年海洋資源の枯渇による収入の減少や都市

化進行の影響による地域の過疎化など様々な問題を抱え，このような状況からの脱却が地域の発展を大きく左右すると考えられるようになった。地域の豊かな自然を観光資源として活用出来れば，地域経済の活性化が期待されると感じられている。

こうした農山漁村のツーリズムの隆盛にともない，研究も徐々に蓄積されてきた。その内容は主として観光政策や郷村観光の特徴の指摘や，今後の持続可能な発展への対策への分析である［呉 2006；王 2008；鄒 2005；郭・韓 2010］。ただし，従来の研究では，農山漁村ツーリズムの構築にあたって，観光商品が如何にして生まれ，地域住民が観光商品の開発にどのように関わってきたのかについて，「在地の側」からの実践的な事例による研究はあまり見当たらない。本論では先行研究の不備を補うと共に，漁村のツーリズムに焦点をあて，さらに戦跡のようなダーク・ツーリズム（dark tourism）を取り込んで考察する。事例として取り上げるのは，旅順周辺の漁村と戦跡である。そして，遼東半島における漁村地域の観光振興の実態を考察し，地域住民が観光資源に関してどのような意識変化を起こすのかを検討し，観光スポットの宣伝への取り組みに関して論じたい。また観光産業の展開中に生じた，自然環境の保全を重視する思想との矛盾や，観光商品の開発過程を注目し，地域ツーリズムの構築に向けて，どんな要素が求められるかを提示する。観光が漁村社会にもたらした社会的，経済的効果について検討し，それが戦跡ツーリズムとどのように結び付けられてきたのかを検討してみたい。

2. 調査地の概観

本論では，最初に漁村の観光産業の促進について検討する。筆者は2003年から旅順周辺の幾つかの漁村に関して継続的に調査を行なってきたが，ここ数年の間に漁村の生々しい変化を目の当たりにし，変化の激しさや問題点の増加を実感した。経済の改革開放後，この地域では1980年代初期に人民公社が解体され，生産請負政策を実施し，個人単位の漁撈活動に携わる人が多くなってきた。1980年代は漁撈資源が豊富であったため，漁民の収入は一気に上がったが，その後は内陸から大勢の外来者がきて漁撈活動に参入し，競争が激化した。従って，現在漁撈に従事しながら，水産業や農業，観光業などに係わる仕事を兼業する人が増加してきた。こうした変化の状況の中で漁村地域を長年にわたって考察してきた筆者も視点を大きく変えて，観光開発に注目した。本論は主として2011年8月から9月中旬までと，2012年2月下旬から3月までの2回の現地調査の内容をもとに構成し，検討している。

観光に関して地元の人々が最初に目を向けたのは豊かな自然と独特な環境であった。2000年代に入ってから，観光開発が大規模に推進され，観光ブームは旅順市内だけではなく，周りの漁村地域にも広がってきた。特に2000年代半ば頃以降は，漁撈資源の枯渇[2)] にともない，漁民の生活が大きくダメージを受け，このような状況の下，身の回りの自然環境を観光資源として開発できれば，村の経済の活性化に繋がると考え始めた。地域の人々が精力的に観光開発に取り組んだ結果，様々な新しい観光商品が生みだされた。旅行会社は旅順の観光を宣伝する際に，歴史遺跡以外にもさまざまな観光商品を掘り起し，観光の資源に取り入れてきた。例えば，老鉄山自然保護区ツアー，老鉄山温泉健身ツアー，龍王塘桜観光ツアー，東北民俗風情ツアー，イチゴ狩りツアー，さくらんぼ狩りツアーなどがあげられる。これらの観光商品を生み出した背景には，試行錯誤を続けてきた地元民の努力があった。どうすれば観光客にその魅力を感じさせ，長く逗留して貰えるかが地元民にとって大きな課題となっている。既存の歴史遺跡以外に，観光資源を更に開発しなければならないという意識が浮上した。

III.　桜と自然保護区

1.　龍王塘「桜花園」の観光

本節では旅順での地域観光の展開において，観光商品の開発や観光客への「宣伝」などに積極的に取り組んできた龍王塘「桜花園」の事例を考察したい。龍王塘は大連と旅順の真中に位置し，南側は黄海に臨んでいる。大連市内から旅順南路に沿って西に30kmの所，大連市内よりバスで40分かかり，比較的交通が便利である。漁村の海岸線は31kmあり，漁撈が盛んな土地である。年間平均温度は10.6度で，林檎やさくらんぼなど果物の産地で，現在では桜の名勝地，龍王塘鎮官房村「桜花園」で有名である。

「桜花園」には毎年春になると，大連や東北地方の観光客が大勢集まってくる。ここは中国国内で最も多くの桜が植えられており，ピンク，白，黄，緑など色彩豊かな桜木が1500本ほどあり，総計8000本ほど植樹され，「中国第一桜園」と称えられている。1950年代から，周恩来，朱徳，宋慶齢など著名な政界人が訪れていて有名であった。近年，龍王塘桜花園を訪れる観光客は，20年前の十数倍にもなっている。特に4月下旬から始まる黄金週間の間には，2011年の場合，一日平均2万人以上の観光客が訪れ，花の香りが漂う桜花園の中で，昼食をとりながら花見を楽しむ人々で賑わう。さらに，2009年に旅順の対外開放で戦跡ツーリズムが大いに推進され，龍王塘桜花園と組み合わせたことで，外国観光客も年々に増える傾向がある。

しかし，近年マイカーで花見に行く人が徐々に増加し，桜の満開の時期には渋滞が続く。交通の利便性を図るために，大連市内から電車の延長工事が進められている。龍王塘「桜花園」は龍王塘ダムの反対側に位置し，「龍王塘ダム公園」とも呼ばれている。実は龍王塘ダムは日本植民地時代の1920年8月に当時の関東庁が主体となって，工事費用190万円余り[3]を投じて1924年3月に落成した（旧名：官房水庫，現名：龍王塘水庫）。堤防は石とコンクリートで造られ，全長は326.2m，高さは37.9m，ダムの面積は37.65km^2，最大の蓄積量は1578万km^{3}である[4]。桜花園の始まりはダム湖に隣接して作られた広大な日本式庭園に遡る。1926年に日本から4000本の八重桜が移植され，ピンク，白，黄，緑，藍など色とりどりの美しさであったという。長い年月が経過して，当時の樹木は10本ほどになってしまった。現在，桜花園で最も観光客の目を惹くのは樹齢百年以上の白木蓮（写真1），中国名では「星花玉蘭」で，約18枚の花びらがあり，花は菊のような姿で，毎年春一番に早く咲き「望春花」ともいう。1988年7月に中国国務院環境保護部によって「珍稀瀕危保護植物名録」に登録された。この木は1926年に東京から大阪経由で桜花園に移植されたもので，日本の植民地時代の名残である。

ダム公園は戦争後荒廃していたが，1990年には，観光地として活用するために，貴重な樹木を8000本植えて整備した。そのうち最も多いのが桜木で1500本，その他は，杏，辛夷，連翹，桃，梅から構成され，特に春に開花する樹木が多い。有名な白木蓮の隣にも若樹が二本植樹された。ダム公園は「桜花園」として有名になり，この後は毎年たくさんの観光客が訪れ，人気が高まってきた。こうして地域観光化の推進のために，植民地時代に造られた場所を新たに整備の対象となり魅力ある観光資源に変貌させたのである。現在，ダムの堤防から眺めると綺麗な桜花園が視界に飛び込み，赤松で造られたオリンピックの五輪を表す立派な造型（写真2）は人目を引く。ここには「平和」の願いが籠められている。実はこの公園は，中国と日本は「無水の河」を「一衣帯水」の海に見立てて対峙し，共に仲良くするというメッセージが籠められていた（図1）。

大連や旅順などは植民地や戦争に関わる土地であるからこそ，友好の場所として新たに観光地として

写真1　百年白木蓮

写真2　龍王塘のオリンピック五輪の造型

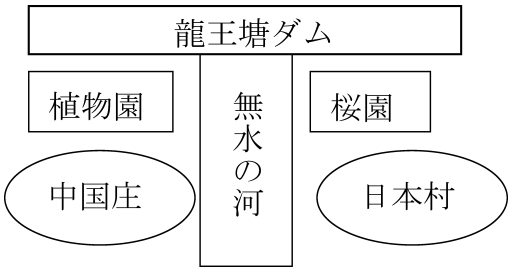

図1　龍王塘「桜花園」の「一衣帯水」配置の構想図
［出典：大藪・大内 2008］

生まれ変わらせた。この地に籠められたメッセージは「平和」であり，観光は平和を前提としなければ成り立たない。

観光開発のために，龍王塘の人々は色々なアイディアを試してきた。1989年に旅順口区の人民政府は，4月20日前後の桜の花の満開時に合わせて，第一回目の「桜の旅」のキャンペーンを実施したが，当時の龍王塘「桜花園」には桜木が少なく，観光は一般国民の間にまだ普及していない時代だったので，個人の観光客の数はほとんどなく，来訪者は主に会社などの団体旅行者であった。経済的な効果も余り生み出せなかった。この教訓を生かし，1990年に管理部門は桜花園に新たに8000本ほどの植樹を行った。効果は徐々に表れたので，1998年には旅順と龍王塘の人民政府は，全国の観光年のキャンペーンであった「華夏城郷游」に合わせて，「大連華夏城郷游」とし，地域の特色として「旅順口の桜の旅」を加えた。日本語に内容を訳せば「98大連華夏都会と農村遊―旅順口桜の旅」で，桜の開花状況に応じて4月25日から5月10日までの間に観光客を誘致する企画を打ち出した[5)]。この地の観光化は1998年に始まったと言える。目的は都会の観光に農村の観光,「郷村観光」を加え，主に地元の資源を用いて，都会と農村の特徴となる民俗風情に価値を見出し，観光客を誘致して旅順の経済発展を促進することであった。この年に大連の他，瀋陽，本溪，鞍山，丹東など都市でも「桜の旅」のキャンペーンが繰り広げられ，数万人の観光客が来園し，地元に大きな経済的効果がもたらされた。

表2　旅順・大連の観光キャンペーン

西暦	主題名
1998	98大連華夏都会と農村遊―旅順口桜の旅
1999 ～ 2004	旅順口区「桜の旅」
2005 ～ 2008	旅順口区「桜花節」
2009 ～現在	中国大連（旅順）国際桜花節

出典：龍王塘街道委員会「龍王塘概況」を参照して作成。

これに味を占めた観光局は，桜の「花見」が重要だと考え，1999年には「旅順口区『桜の旅』」というキャンペーンを展開し，2004年に至るまで，毎年4月下旬から5月上旬に「桜の旅」のキャンペーンが継続して行なわれた（表2）。2005年には，旅順口政府は「桜の旅」を「桜花節」，つまり「桜祭り」の名称に変更した。「旅」ではなく「祭り」と改名し，年中行事として組み込んで一層の拡大化を図ったのである。

2005年は第一回「桜花節」で，龍王塘桜花園は賑わった。また2008年は「桜でオリンピックを迎える遊園大会」と「春の旅特色遊」を同時に宣伝するキャンペーンが行なわれた[6)]。龍王塘桜花園の影響は広がり，大連市内の各地に桜が植樹され，大連市内の桜花園も開園してオープニング・イベントが開催された。この年のイベント開催にあたっては「広，新，好，穏」の四文字でその趣旨が表された。「広」は広範囲に宣伝すること，「新」は観光資源に新機軸を導入し，龍王塘桜花園の以外の新しい桜花園にも重きをおいて宣伝すること，「好」は観光スポットのサービスなどソフトの面にも力を入れること，「穏」は観光中の安全は第一であることを意味する。この新しい理念のもと，2008年に龍王塘桜花園を訪れた観光客は10万人以上に上り，観光収入は百万元以上に達した。桜を焦点にした観光開発は見事に成功したのである。

2.　2009年以後の旅順観光

2009年11月，旅順口区が全面的に外国人に開放され，軍事禁区以外は自由に入れるようになった。ここには中国海軍の関連施設があり，これ以前は「203高地」と「水師営」の2ケ所以外は一般公開がされておらず，市街にも入れなかったのである。2009年3月20日開放にあたっての説明会では，2008年の区のGDPは対前年比24％以上の伸びを示し，外資企業230社が進出し日系も76社含まれるとし，今後の更なる投資を呼びかけた。観光開発もその中に組み込まれ，大連市政府は外国人観光客を誘致するために，2009年には大連市旅游局は，「旅順口区桜花節」を第一回「中国大連（旅順）国際桜花節」に変更し，外国への宣伝にも力を入れるようになった。期間は桜の開花に合わせて4月26日から5月11日までであった。つまり，旅順と大連の双方の「桜」を強調し，「旅」ではなく「祭り」（節）として祝祭色を強めた。そこには日中友好の象徴として「桜」を設定し，「花見」好きの日本人観光客を呼び込もうという意図もあった。「国際桜花節」の主会場は，日露戦争の激戦地であった203高地の南面山麓にある旅順口国家森林公園内の「旅順桜花園」であった。ここは，旅順口区人民政府の管理下にあり，既に1993年には，植民地時代の旅順の小学校と中学校のOBを中心とする旅順児童教育後援会が，日中友好の象徴として桜1200本を寄贈していた。さらに株式会社ジャルパックが2009年に「中日友好桜林」

造成に乗り出し，日本航空と協力し，旅順二〇三景区内の23.3万m^2の敷地に2000本の桜を植樹した。日中友好のために中国屈指の「桜花園」を建造し，大連市旅順への観光客の呼び込みの起爆剤となることを目指した。2009年8月8日には，大連日航ホテルで旅順口区人民政府の恵区長立会いの下に，大連旅順旅遊集団と，日本航空，ジャルパック，大連東北国際旅行社，大連ライオンズクラブの間で，建造に関する合意が締結された。ジャルパックは，2009年の10月～2011年4月の期間に2000名の送客を目指したとされる。かつての戦跡の負のイメージを逆転し，観光客による経済発展につなげる試みであった。これに先立って，大連では旅順の戦跡を「世界遺産」に登録申請する動きもあり，さまざまな要因で申請はしなかったが，目的は観光開発である。龍王塘桜花園に始まった「桜」キャンペーンは旅順の観光の在り方を大きく変えた。

2010年の第二回「中国大連（旅順）国際桜花節」は，旅順市旅遊局，旅順口区人民政府と国際旅行中国執行委員会による共同主催で，二〇三景区に新しく整備された「旅順新桜花園」を主会場とした。50万m^2の敷地に，世界各地から100数種類の樹木を集め，3000本あまりの多数の種類の桜の木が植えられ，観光客を呼び寄せた。旅順口区政府はこのイベントのために1000万元を投資し，園内と外部の道路や駐車場を改修し，駐車場の周辺に演技区，購買区，料理区を開設し，観光客のために休み場所，買い物場所，特色ある料理などを提供した。料理には初めて桜を使用した食品を取り入れたという。第二回「中国大連国際桜花節」開幕式は，5月1日に龍王塘支会場で開催された。この年は寒波のために4月中旬から下旬に開花する桜が遅れて，5月初旬にやっと咲きほころぶ状態であったが，日本航空協賛で，地元の歌舞団や留学生らの演出が華やかに行われた。今後は定期的に植樹を行って維持するという。日中友好の雰囲気が強くただよう。大連や旅順には，この他にも，大連星海桜花園，労働公園桜花園，中山公園桜花園など多くの「桜花園」があり，観光地として連動して観光地化を目指した。この時には，併せて“春の旅”シリーズツアー，老鉄山採茶温泉健身ツアー，東北民俗風情ツアー，科学普及教育ツアー，歴史文化街区ツアー，イチゴ狩りツアーが企画され，さらに2011年に「ミス・国際旅行2011決勝」も開催された。

荒廃していた龍王塘桜花園は，桜を焦点とした観光開発が起爆剤となり，人気のある観光スポットに生まれ変わった。これは国家指導の政策の影響も否定できないが，地域住民が，あらゆる文化を吸収し，あらゆる資源を活用する積極性があったからである。また，観光産業の推進には適切な「宣伝」が巧みに活用された。中国にはなじみのない桜の「花見」は，日本の影響を受け，観光開発の進展にともない，中国にも定着し始めている。龍王塘桜花園は日本を含む外国からの観光客によい思い出を残すものであるだけでなく，中国人観光客の動員も可能にした。龍王塘の観光資源のブランドとして桜は評価されている。底流にある「平和」「友好」のメッセージは2010年以後の日中間の摩擦により陰りを見せているが，長い目で見れば，観光の効果は広く深く浸透していく可能性がある。

観光は社会，文化，経済，環境，情報，政治などさまざまな分野と絡み合っている。観光の推進過程には，国家政策の影響が大きいが，地域社会住民の協力や情報の伝達も見逃してはならない。観光化には来訪を可能にする契機が大事であるが，地元の長い視野を持った多様な要因の組み合わせ方が重要である［前田 1995］。

3.　老鉄山自然保護区の観光

旅順近郊には別のツーリズムの展開がある。それは「中国大連（旅順）国際桜花節」に合わせて行わ

れている「老鉄山採茶温泉健身ツアー」である。大連では1998年に始まった現地滞在型の「郷村観光」を老鉄山自然保護区や老鉄山温泉を中心に展開したのである。郷村観光とは英訳のルーラル・ツーリズム（rural tourism）の中国語訳で，1990年代に始まり，2000年代に入って本格化した。中国全体では1998年と2006年をキャンペーンの年としたことは既に述べた。改革開放前は，農業や漁業を中心に生活を営んできた農山漁村は，1990年代以降は観光産業に巻き込まれ，経済の波及的な効果が拡大した。この動きを意識的に推進した結果，従来は観光産業と無縁だった地域が観光地化し，観光に関する認識を変えた。旅順近郊の老鉄山自然保護区は，観光資源の開発に積極的に力を入れた郷村の典型である。しかし，この地が観光地になったのは2008年からで，何の変哲もない日常の自然景観が突如，観光資源とされ，住民の意志とは別に地域経済の発展が優先されたのである。

老鉄山自然保護区は遼東半島の最南端に位置し，蛇の保護区の蛇島と渡り鳥の保護区の老鉄山地域からなる。老鉄山は1980年に中国国務院に野生動物保護区と認定され，以後地域の人々による野生動物保護への取り組みが始まった。現在では老鉄山は観光資源と把握され，地域観光産業の重要な柱となっている。本節ではその内容を論じる。

老鉄山は標高465.6メートル，緑に包まれていて渡り鳥の重要な生息地で，「鳥の旅館」または「鳥のホテル」と呼ばれている。毎年秋になるとシベリアや興安嶺，モンゴル草原，及び東北地方から多くの鳥の群れが南方に渡る時に，途中の休憩地としてこの周辺で数日間休み，その後に広い海を渡って南方で冬を過す。春には老鉄山を経由して北方に戻る。昔から老鉄山周辺の約170㎢，中心の40㎢の地域は全て鳥の生息地域で，春と秋には二百十数種類の鳥が一時的に集り，鳥の楽園のようである。その中には丹頂鶴，ソデグロ鶴，鴛鴦など国に保護されている十数種類の珍鳥も含まれる[7]。毎年数千万羽の鳥が必ず老鉄山を訪れ，その後の旅のために体力を蓄えようとするのである。

この地域は，鳥と切っては切れない縁があり，鳥に関する民俗的な伝承や物語もたくさん残されている。昔から「寧吃飛禽四兩，不吃走獸一斤」（飛ぶ鳥類を200グラム食べるとしても，500グラムの獣も食べない）という言い回しがある。この地域では昔から鳥を食べる習慣があり「照雀」（鳥を捕獲する）の習俗が盛んであった。秋の夜に人々は灯火や捕獲用のネット，拳銃を用意し，山に登り夜中にネットで罠を作り，地面や松ノ木の枝にかけて待ち構えて捕獲する。春と秋の季節には，山のあちこちに鳥の捕獲用の灯火が見える。猟師は人間だけではなく，忙しいときには猫も動員し，鳥の捕獲に手伝わせた。ここでは鳥の数が多く容易に捕獲出来たのである。

しかし，80年代に老鉄山が自然保護区に指定されると，旅順区政府は自然保護区管理部門を設置し，自然環境を破壊する行為を取り締まった。鳥の捕獲行為には罰金が課せられ，地域住民に鳥の保護を呼びかけた。また，小学校から高校まで鳥を保護するボランティアチームを結成し，民間にもボランティア活動を広げたので，昔のように鳥をやたらに捕獲する習慣はなくなった。現在では，鳥は地域繁栄のシンボルとされ，住民たちは「愛鳥護鳥」（鳥を愛し鳥を保護する）の意識を持っている。地域住民は鳥を保護し，観光客によりよい観光資源を提供し，それが全世界の鳥の生態系維持にも繋がると信じている。このような認識は「環境保護」という西欧由来の概念が，地域社会に受け入れられ，鳥は捕獲して食べるものから，一転して保護されて鑑賞の対象になるものへと認識の大転換が起こった。その結果，渡り鳥は観光資源となり，観光による地域経済の活性化に役立つことが，今後も大いに期待されている。

自然保護区の老鉄山には，さらにもう一つ「黄海・渤海境界線」という景勝地があり，観光客の関心

写真3　黄海・渤海境界線の石碑

写真4　老鉄山百年灯台

をひきつけている。老鉄山の西南側が海に没する所は遼東半島南側の最先端で，「黄海・渤海境界線」の石碑（写真3）が立ち，黄海と渤海が融合している。ここの景観は「黄海不黄，渤海不藍」と言われ，黄海は黄色くなく，渤海は碧くはないという珍しい景観になっている。空は青いのに，海を眺めると，少しぼんやりしていても，黄海と渤海の境界線ははっきりと見える。左側は黄海，右側は渤海である。風の日になると色が入り混じる。この絶景の描写には「一山観二海」（一つの山に二つの海が見える）という表現が使われる。

さらに老鉄山の海抜86.7メートルの岬には百年灯台という清代に造られた灯台がある。百年以上の歴史を持ち，1894年の日清戦争と1904年の日露戦争を経験したものの，依然として往来の船を誘導している。灯台は1893年にフランス人が内装の機械を製造し，イギリス人が据え付けの工事を担当して完成させた[8)]。灯台の高さは14m，全体は円柱体で，灯台の上から四方八方を見渡せる。1997年に世界航路標識組織によって，「世界名塔」と指定され，現在では「中国第一灯台」と呼ばれている。2000年に「黄海・渤海境界線」と，百年灯台（写真4）は大連市新八景の一つに指定された。現在では，ここを訪れる数多くの観光客は大自然の雄大さに感動する。

観光資源は一般的に自然観光資源と人文観光資源に分けられるが，老鉄山自然保護区には自然観光資源と人文観光資源の双方が備わっている。「天下奇観」と称えられる「黄海・渤海境界線」と，原始の生態を保つとされる「鳥の楽園」は自然観光資源となり，悠久な歴史を感じさせる「百年灯台」は貴重な人文観光資源となっている。両者は観光客に自然景観の感銘を与えると同時に，歴史の豊かさも感じさせることになる。

しかし，2008年頃まではこの場所はさほど有名ではなく，旅順の対外開放以後に，観光コースに組み入れられることで，「観光地」になったのであり，新しい観光資源なのである。2008年に老鉄山地域は大連市に「特色のある観光郷鎮」に選ばれた。さらにこの場所に観光資源としての利用価値を見出したのは，2009年の旅順の外国人への開放にともない，地元の人々は老鉄山自然保護区を観光資源として開発すべきであると認識してからである。観光客を受け入れるのに相応しい大規模な修繕工事が始まり，自然保護区の入口に正門が建てられ，以前の泥道はアスファルトに舗装され，新しい道路が完成した。雨天でも観光できるように屋根のある見物台が建てられていた。同時に地域の収入源を増やすた

め，観光客は無料とはせず，旅順区以外からの外来の観光客は一律に20元の入場券を求めてもらうようになった。現在では旅順を訪れる観光客の中には老鉄山自然保護区を観光しない人がいないほど有名な観光スポットとなっている。

老鉄山自然保護区の環境保全には，地域住民の全面的な協力がある。地域住民には全く理解不能な「環境保護」という概念が現れることで，それまでの生活は大きく転換した。野鳥は自由にとることが出来たし，生活の一部であり，時には乱獲に至ることがあっても規制は緩かった。老鉄山地域は自然保護区に指定されて以来，住民の間にも環境保護の意識が高まり，自然保護区への破壊行為を防ぐことが可能になった。しかし，住民にとっては不本意なこともあった。老鉄山及び旅順口区政府の宣伝と効果的な取締りの実施の結果であったからである。地域ツーリズムの構築においては，突然に外部から強制される新たな概念と制度化によって，大きな変化が現れる。ここでは地域住民の協力が不可欠であるが，行政側との接点に置いてはさまざまの問題が浮かび上がる。老鉄山では二つの保護区のうち，蛇の保護区である蛇島は個人の自由観光は制限され，観光開発の恩恵には預からなかった。観光資源とは外部者の視点で，恣意的に選択され，その後は長期にわたる交渉が続き，経済の論理に押し負かされることが多いのである。

IV.　温泉と郷村

1.　老鉄山温泉

2000年代以降，特に2009年の外国人への旅順開放以降は，旅順周辺の漁村は独特な観光資源に恵まれているという観点から見られるようになった。ユニークな観光資源をいかに活用し，魅力を引き出すかが，今後の地域のエコツーリズムの推進の重要なポイントと見なされるようになった。国連は1992年にリオデジャネイロで開催された地球サミットで，21世紀の地球環境保護のための「アジェンダ21」で，2002年を「国際エコツーリズム年」と定めた。これは「持続可能な開発」(sustainable development）として，観光を組み込む試みで，エコツーリズムの概念が中核に据えられた。エコツーリズムは西欧で作られた概念で，地域の自然や文化を深く理解し，保全と活用を通じて観光を持続的に発展させる地域主体の開発として奨励された。その中核には地域の自然や文化を体験して理解を深めることで，地元の人々との交流が望ましいとされた。中国では1992年以来，独自の形で，エコツーリズムを取り込んできた。

前田勇は「観光対象」を「観光資源」と「観光施設」に分類し，観光資源を「自然観光資源」,「人文観光資源」,「複合型観光資源」に分けている［前田 1995：123］。観光資源は自然観光資源と人文（文化）観光資源に分類されるが，自然観光資源も文化観光資源も独立して存在しているのではなく，双方が相互作用しあって複合型観光資源となっている。エコツーリズムでは自然観光資源が対象となる割合が高いが，単独の実施というよりは実際には文化観光資源との相互作用のなかでセットの観光資源になっていることが多い［敷田・森重 2011：30］。「自然観光資源」と「人文観光資源」は観光産業の主軸であるが，それ以外に媒介的な機能が果たされている「観光施設」も「エコツアーガイド」も重視すべきであることを指摘したい［図2］。豊かな自然観光資源と独特な人文観光資源に富むとされる旅順は，今後観光産業の展開の大きな可能性を秘めているが，同時に観光客との媒介機能を果す「観光施設」が殆どないのも現実である。この状況を改善するために，地域の人々は様々な方法を模索している。本節では老鉄山温泉の事例を中心に，観光施設の建設及びその役割に関して考察してみたい。

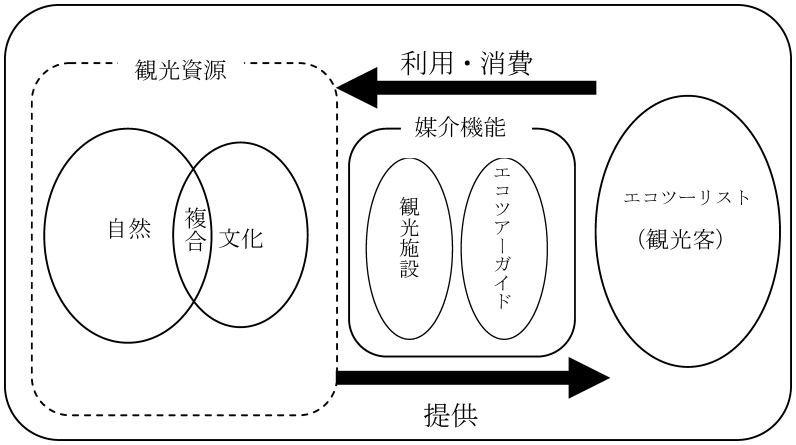

図2　エコツーリズムにおける観光資源と観光施設及びエコツーリストの関係
［出典：敷田・森重 2001］

老鉄山温泉は遼東半島の西南端の尹家村に位置し老鉄山自然保護区のすぐ近くにある。大連市内から55キロで，市内から老鉄山温泉までのシャトルバスが一日に二回往復している。大連市内の観光客もよく利用し，平日の料金は大人128元，子供は78元で，無料で一食が提供される[9]。団体や祭日の場合は割引する時もある。旅順から行く場合は路線バスが三本通っており，交通はかなり便利である。現在では中国国内の観光客だけではなく，日本やロシア，韓国の観光客もよく利用する。老鉄山温泉は2002年に日本企業との共同開発で完成した。井戸掘り工程は殆ど日本側に任せ，施設の建設は中国側が担当していた。老鉄山温泉の正門は目立たないが，中に入ると14棟の建物が並べられ，結構広い空間である（写真5）。温泉施設の敷地面積は6万m^2で中には和式温泉，露天風呂（写真6），室内大浴場，和式畳室，伝統中国室，温泉別荘などがある。温泉は地下1500m掘削した所で30種類の鉱物を含む天然温泉が湧出したという。

老鉄山温泉は弱アルカリ性の単純温泉で，温泉水は無色で透明度が高く処理を施さなくてもそのまま飲用できる。源泉の温度は摂氏58度で，一日当たりの湧出量は300トンぐらいである。温泉の質は柔らかく，刺激が小さいために美人湯と呼ばれ，女性には人気がある。さらにこの温泉水は料理に使用してもよく，鉱物が食材に溶け込めばご飯も柔らかくより美味しくなるとガイドサイトに紹介されている[10]。

老鉄山温泉は他の温泉と同じく神経痛，筋肉痛，関節痛，肩こりなど様々な病気を治療する効果があるとされるが，観光客が温泉を訪れるのはそれだけの理由に留まらない。旅順の観光は半日周遊コースを利用することが多く，大連の観光が中心であった。旅順には観光資源の魅力が欠けていたこと，2009年以前は日清戦争と日露戦争の戦場遺跡としての過去の重みがあり，外国人が自由に観光できなかったという政策の影響も考えられる。旅順には戦跡や記念碑や歴史博物館が多く残されており，2009年以降は多くが観光スポットとなった。しかし，旅順の観光は植民地や戦争の歴史に関わるものが多く，観光客は厳粛な雰囲気のなかで見物するので，心が痛むような「負の感情」が湧き起こり，旅行の印象が暗くなりがちであった。観光客の歴史遺跡に関する認識はばらばらで，「負の感情」への対応が十分でなく，旅順観光への「期待」は実際の体験と大きなズレが生じ，満足度が低く評判も悪くなった［李・

写真5　老鉄山温泉全体風景

写真6　老鉄山露天風呂

謝 2009: 45]。観光客の多くは半日で旅順を観光した後に，すぐ大連に戻って宿泊するのが一般的であった。旅順が観光客に与える印象を改善しなければ，観光客が二度と足を運ぶことはない。こうした危機意識の下，旅順と組になる気分転換の場として老鉄山温泉が誕生した。老鉄山温泉の社会的文化的な意味は単なる観光の手段としての温泉施設の場を遥かに越えていた。

現在，温泉は観光客のリラックスの場，気分転換や，観光客の間に交流を促す場として利用されている。また，中国人観光客と日本人観光客の相互に異文化を体験させ，相互に自国文化を再確認する場所となった。1990年代以降，日本の観光のキーワードに「癒し」が登場した。海外の観光も，忙しく観光するものからのんびりとくつろぎ，心身を癒すものに変わりつつあると山下晋司が指摘している［山下 2007: 6]。老鉄山温泉はまさしく観光客の時代的変化に応じて造られ，「癒し」の要素が強い。今後も癒しのツーリズムの好調さが続けば，需要は大きく伸びると見込まれている。老鉄山温泉は観光客に楽しい旅を提供することを狙いとした。旅順の観光も老鉄山温泉をはじめ食事や宿泊も旅順の周辺の施設を利用させ，長く滞在させるような工夫を凝らしている。また，この地を観光する頻度が高いと予想される桜と温泉好きの日本人観光客を満足させるくつろぎの場として適切だと考えている。近年では老鉄山温泉の知名度も徐々に高まってきた。特定の公共空間で同時に幾つかの機能を果たす場として重要な役割が期待され，地域観光の象徴といっても過言ではないであろう。観光施設は単なる食事と宿泊の対応に終始する接待の場としてだけの存在ではないことをこの事例は示している。

2. 「農家楽」と「漁家楽」

観光資源を観光客に提供する場合に，観光施設が果たす「橋渡し」の役割は重要である。観光地に立地するホテルや旅館は当然その担い手であるが，「郷村観光」の隆盛にともない，民家に宿泊することも重要な手法として登場してきた。1998年に国家旅游局はこの年の旅行キャンペーンを「華夏城郷游」と定め，「吃農家飯，住農家院，做農家活，看農家景，享農家樂」（農家の料理を味わい，農家に宿泊，農作業に参与，農村の景色を見物，農家の楽しさを享楽する）というキャッチコピーが打ち出された。それがきっかけで，「中国郷村観光」という新しい産業がこの地でも推進されてきた。中国では観光客が農村や漁村を訪れ，地元料理を味わい，地元の人々と一緒に農産物の収穫や水産物を捕獲することを体験する観光がブームになってきた。観光客にとっては民家の宿泊は，農村や漁村の日常生活を体験す

るのみならず，地域文化に触れ合う貴重な機会でもある。このような農村や漁村の伝統文化への理解を深める新しい観光スタイルは「農家楽」または「漁家楽」と呼ばれ観光客の間で人気を博している。

「農家楽」または「漁家楽」はレクリエーション観光の一種で，「農家」「漁家」という普通の人々の家を「観光施設」媒介とし，これを媒介して農山漁村のツーリズムの推進を目的とした。中国では「郷村観光」というが，内容は欧米先進国で提唱されたグリーンツーリズム（green tourism）と類似性があり，農山漁村の自然景観を観光の対象として捉え直したものである［張 2010］。英語のgreen Tourismは有機農法，環境に負荷の少ない宿泊施設，美しい自然環境，さらには環境教育など，環境への配慮が強調された観光となる［堂下 2007：115］。一方，中国の「農家楽」「漁家楽」は当然環境への配慮も強調するが，特に農家の素朴な生活環境を体験し，農山漁村の民宿に泊まって相互に交流を深め，農家や漁家の伝統的な生活習慣および文化をよりよく理解することが期待される。欧米のグリーンツーリズムとも類似するが，その中の一部が現地での宿泊にこだわる中国型グリーンツーリズムへと変貌してきた。これと似た動きにエコツーリズムがあり，「環境保全」を強く意識化する運動で，中国でも「生態観光」として根付いてきた。

中国で最初に「漁家楽」を推奨したのは舟山群島で，1999年7月31日舟山群島の嵊泗地域で漁民が五隻の船で上海からの観光客を案内し，漁撈活動などを体験させるという観光内容が盛り込まれていた[11]。これ以後毎年の休業期に「一日漁民になる」というスローガンを掲げ，漁村への観光を呼びかけている。また2005年9月に舟山群島では東アジア国際釣り大会が行われ［黄・周 2007：32］，その反響は一気に大きくなり，その後全国の漁村では徐々に「漁家楽」のブームを広げるようになった。

しかし旅順周辺の漁村で「漁家楽」を取り入れるのはその数年後のことである。最初に流行ったのは「漁家楽」ではなく「農家楽」であった。2007年に老鉄山郭家村は「農家楽」のキャンペーンを打ち出し，観光客に積極的に農家の魅力を宣伝し始めた。郭家村は老鉄山自然保護区の中心地に位置する約500人の小村である。1976年に郭家村には5000年前の旅順最古の村落遺跡[12]が発見され，郭家村の周辺が旅順の発祥地といわれるほど重要な文化財となった。以後，その周辺は自然保護区と定められ，工場や病院などの建設が禁止された。現在郭家村の周りには工場が一軒もなく，昔のままの生態系を保っている。そのために，経済改革開放後，郭家村は周りのほかの村と比べ，経済的にはるかに遅れをとり，一人当たりの収入は旧旅順口区での最も低い村であった。近年は人口の過疎化も加速している。このような状況を早く改善しなければ，村の将来に危機感が募る一方である。そこで，2007年から村人たちはさくらんぼなどの果物の栽培に力を入れ，その後は毎年さくらんぼ狩りツアーなどのイベントを開催している。2009年に村を訪れた観光客はほぼ四万人以上で「農家楽」による総収入は165万元ぐらいであった。2010年には村で「農家楽」を経営している4戸が大連市に模範「農家楽」として表彰された[13]。郭家村のさくらんぼも旅順地域に広がり，地域の名産物になった。

「農家楽」の影響で旅順周辺の漁村でも「漁家楽」が流行るようになった。「漁家楽」は「農家楽」との共通点も相違点もある。内容は漁撈活動の体験や潮干狩り，魚釣り及び魚料理を味わうなど「海」に関わる内容を中心とする。漁家でしか体験できないものでもあり，特に夏には大勢の観光客が訪れる。「漁家楽」は観光客に漁家の日常生活を体験させ，漁村の伝統的な生活習慣や民俗文化などを理解してもらうことが何よりも重要である。また観光客に自然に包まれている漁村の素晴らしい風景を遊覧してもらい，地域の独特な魅力を実感させる効果もある。近年「漁家楽」を運営している人々は漁村の伝統的な海鮮料理や独自性のある料理に着目し，観光誘致などに利用している。その背景には最近漁村の新

鮮な海鮮料理目当ての観光客の増加傾向があり，特に内陸からの観光客は海鮮料理を観光の目玉とする人が多いからである。従って観光客の需要や「食」への嗜好に応じて，新鮮な海鮮料理を提供するのが「漁家楽」の不可欠な条件となっている。例えば老鉄山にある「漁家楽」は河豚料理が有名なので市内からわざわざ食べに来る人もいる。またこの家では自ら飼育している豚や鹿を料理に使用し，観光客に新鮮な食材を提供するように心がけている。地域の人々は観光客が普段なかなか入手できない新鮮な海鮮品や地域の「郷土料理」を賞味することを通じて地域食文化の特徴や自然環境の大切さを一層理解できると確信しており，「郷土の味」を造ることが大切で，漁村の「体験」及び「風景」「食」などがうまく融合すれば相乗効果による漁村全体のイメージアップにも繋がると考えられる。

「農家楽」「漁家楽」の魅力は何といっても，滞在費の値段の安さである。季節の変動はあり毎月多少は変わる。成都は一日40元～50元，北京は一日70元～80元であるが[14]，旅順周辺の「農家楽」「漁家楽」はシーズンオフには40元ぐらいで，最盛期でも80元程度である。他の地域の「農家楽」「漁家楽」の観光とはあまり差がない。また「農家楽」「漁家楽」は旅順の近郊に多く，大体市内から30分から1時間の距離であったので，観光客の往来は非常に便利な所である[15]。値段の手頃さと場所の利便さは今後「農家楽」「漁家楽」を促進する後押しの要因となるであろう。しかし，もっと重要なのは土地の人々との交流であり，お互いが学びの精神を以て気持ちを和らげていく効果が生まれることである。旅順周辺の「農家楽」「漁家楽」は他の地域よりスタートが遅かったため，経験不足などさまざまな問題に直面している。特に衛生や通信などにおいては改善すべき点が多々あり，今後のツーリズムを「持続可能な開発」の視点に立って，問題点を克服することが求められている。「農家楽」「漁家楽」による観光ブームは観光産業の新しい出発点となり，今後農山漁村のツーリズムを推進し，農山漁村の豊富な自然資源を更に活性化させるものとして注目されている。「郷村観光」を当初からキャッチフレーズとしてきた大連・旅順は，試行錯誤を重ねながら多様性に富むツーリズムを作り上げ，観光客の好奇心や要望を満たすように工夫を重ねてきている。

V. 結び

以上，旅順周辺における漁村の観光事例を中心に述べてきたが，龍王塘「桜花園」，老鉄山自然保護区，老鉄山温泉などの事例を通して，農山漁村のツーリズムの構築において一体何が必要であるかが少しずつ見えてきた。三つの事例をしいて差異化して述べれば，桜花園の事例は観光商品を推進する際の情報発信，「宣伝」やイメージ造りがいかに重要であるかを伝える。また老鉄山自然保護区の事例は「地域住民の協力」がなければ観光産業の推進は難しいことを示唆し，観光客の想いとはズレが発生することに注目した。老鉄山温泉の事例では，観光開発にあたっては，自然観光資源と人文観光資源のみならず，「地域交流の場」となる観光施設が担う役割が大きいことがわかった。

地域ツーリズムの展開において何よりも大切なのは地域の「独自性」のある観光商品を創出することである。「農家楽」「漁家楽」のように地元に滞在すれば，地域の伝統文化に触れる機会を造ると共に，新鮮な食材の個性を生かした食事が期待される。エコツーリズムであれば，自然環境に関して新しい保護のかたちを考える。観光による地域振興を目指すならば，地域の誇りを見出すこと，新たな交流の機会を創出すること，地域間の交流と協力を活性化することなどが挙げられようか。魅力のある観光資源は観光客に忘れられない体験を提供する一方，地域社会への貢献も大きい事は否定できないであろう。

旅順とその周辺地域の観光振興は，2009年以後，大きく性格を変え，古戦場見学などに偏っていた

集客姿勢を大きく改善することへの期待へとつながっている。ダーク・ツーリズムへの対抗策の模索が旅順の課題である。しかし観光産業の推進はこれだけにとどまらないであろう。観光産業が地域社会に与える経済的社会的な効果は，「持続可能な開発」という理想形を造りだすのであろうか。政治情勢の変化に敏感な状況にある旅順や大連の観光は，不確実性も含み込んでいるので，その理想形をいかに見出すかは今後注目されつつある。

最後に観光産業の推進により地域社会にもたらされる効果をまとめておく。

① 自然観光資源の持続的な利用にあたっては，住民がこれまで持っていなかった自然環境を保護する意識を浸透させる必要がある。地域の人々が自然環境の保全に積極的に自覚的に取り組んだ結果，自然をあるがままの状態に保つことが可能となった。

② 近年になって海洋資源の減少が顕著になり，地元の漁村に生きる人々の漁撈による収入は以前より少なくなってきた。しかし，これと代替・補完する形で漁村観光を資源とする視点を導入することで，漁村地域の開発は新たな局面に移行しつつあり，地域経済の活性化を促進し，漁撈以外の収入が増えてきた。

③ 観光産業の振興によって，地域雇用の問題を解決することは社会の安定にも繋がっていると考えられ，少しずつ雇用が安定化する方向に向かいつつある。

④ 観光目的で訪れる観光客は，漁村の新鮮な水産品や農産品に魅了され購入するときもある。観光客を通して地域の販売網も広げる可能性がある。漁民たちは商業民でもあり，経済の変化に関しては農山村の住民より敏感で巧みに対応する。

⑤ 大連や旅順市内への移住現象が近年になって顕著に現れている。地域観光の振興によって，地域人口の過疎化を阻止することは，これに対する最善な政策であろう。

旅順とその周辺は，2009年の外国人への開放によって，生活空間に新たな意味を見出し，観光資源として利用することを積極的に考えるようになった。地域社会の発展にあたっては，資源化できると考えた地元の独自性という宝物を，いかに探し，磨き，鍛え，傳え，誇るものに変えていくかが問われる。旅順における観光資源は，過去と切り離すことは出来ないが，新たな物語を育むことで，ゲストとホストの相互理解へと向かう。旅順は歴史と現在をよりよく理解するための重要な観光地になる可能性を持つ。

注

1) 中国では漁業も農業の中に含まれ，一般的に「農林牧漁」と呼ばれる。「農村地域」の中には当然漁村地域も含まれる。

2) 2000年代半ば頃から，中国の「三漁問題」が顕著に現れる。「三漁問題」とは所謂「漁撈資源の枯渇，漁民生活の貧困化，漁村経済基盤の脆弱」という問題である［于立，孫康，徐斌 2007］。

3) 大正13年前後の金額である。当時の人件費は職業により異なるが，一日の平均収入は以下のようになる。大工は80 ～ 2.00円／日，瓦職は80 ～ 2.50円／日，石工は80 ～ 2.50円／日，土工は60 ～ 1.50円／日であった。遠藤壽儼1932『新しき満蒙の手引き』を参照されたい。

4) 龍王塘ダム公園は20世紀20年代の日本植民地時代に造られ日本との縁も深い。ダムの設計者は福岡出身の倉塚良夫氏で，北海道大学に勤務し，日本近代土木建築界の大物であった。2004年12月6日に藤井肇男の編集により出版された『土木人物事典』に氏の写真や業績やデザイン図などが掲載されている［大藪・大内 2008: 22］。桜花園を中心に実施した現地調査結果によると，龍王塘ダムの反対側の真中は無水の河で，東側は桜花園と日本村で，西側は植物園と中国庄である。これらの配置の構図をよく考えると，周恩来元総理が日中関係を

喩えた時に言った「一衣帯水」という四字熟語が思い起こされる［大藪・大内 2008: 23］。龍王塘桜花園はこの言葉の含意がうまく反映されているのではないか。桜花園はこの構図をもとに造られたが全てが完成するまでには至っていない。もしこの構図通りに実現できるなら，中国と日本の交流の象徴として観光資源による経済的効果が期待される。

5) 1998年に中国国家旅游局は「中国華夏都会郷村観光」を推奨するキャッチフレーズを使った。これに応じて大連・旅順では「桜の旅」という宣伝活動が行われたと考えられる。
6) 2008年を中国国家旅游局は「中国オリンピック観光年」と定めた。旅順の「桜でオリンピックを迎える遊園大会」は国の政策の実践例としてあげられる。
7) 鉄山街道委員会編集の『遼南名鎮―鉄山街道』2010年を参照されたい。
8) 鉄山街道委員会編集の『鉄山街道農［漁］家休閑旅游項目紹介』2008年による。
9) 大連老鉄山温泉健身休閑有限公司が発行したパンフレットより。
10) 老鉄山ウェブサイト（http://www.ltswq.com.cn）を参照されたい。
11) ［黄薛艶，周宁］2007に詳しい。
12) 郭家村遺跡が1976年に発見され，下層は5000年前の遺跡であり，中層は4000年前の遺跡であることが明らかになった。
13) 鉄山街道委員会が編集した『遼南名鎮－鉄山街道』2010年を参照されたい。
14) ［鄒統钎 2005］に詳しい。
15) 鄒統钎は郷村観光成功の要点を下記の四点にまとめた。①観光地を名目とする場所。②厚いもてなし，「家」の雰囲気がある。③観光客の分配は行政権力が行うこと。④交通の便が良い，つまり市内から1時間～2時間ぐらいの距離であること［鄒 2005］。

参考文献

日本語

大藪多可志・大内東　2008『北東アジア観光の潮流』海文堂出版.
王　文亮　2008「中国における「三農観光」の現状と課題」『中国21』Vol. 29　pp. 77–94.
王　楽平　2000「農村地域における観光振興の効果について―中国雲南省石林県を事例に―」『明治大学教養論集』338号　pp. 23–43.
遠藤壽儼　1932『新しき満蒙の手引き』兵林館.
佐々木一成　2008『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社.
敷田麻実・森重昌之　2011『地域資源を守っていかすエコツーリズム―人と自然の共生システム』講談社.
張　広帥　2010「郷村観光の定義とその重要性に関する一考察」『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』6　pp. 83–90.
堂下　恵　2007「グリーンツーリズム―京都府見山町」山下晋司編『観光文化学』新曜社　pp. 115–118.
前田勇　1995『現代観光総論』学文社.
山下晋司（編）　2007『観光文化学』新曜社.

中国語

于立，孫康，徐斌　2007「“三漁問題”与公共政策調査思路」『公共管理学報』14(2)　pp. 30–35.
黄薛艶，周宁　2007「漁村旅游客源市場分析与行為模式研究」『農業経済』3　pp. 32–34.
呉倩妮　2006「我国“農家楽”旅游的現状和発展対策」『長江大学学報』13(3)　pp. 127–130.
鄒統钎　2005「中国郷村旅游発展模式研究」『旅游学刊』3(20)　pp. 63–68.
郭煥成・韓非　2010「中国郷村旅游発展綜述」『地理科学進展』29(12)　pp. 1597–1605.
李磊・謝春山　2009「負感旅游資源主導下的旅游開発戦略研究」『広東農工商職業技術学院学報』25(1)　pp. 44–48.